

想
い
初
め
た
る
鈴
蘭
へ

新緑の木々に隠れて建つその邸宅は、二年を過ぎた彼の国の景色を思い起こさせた。神戸市街から須磨へ、馴れない運転の末に辿り着いた洋館を目前にして、尚春は自動車を降りた。白漆喰と褐色の木材の柱を組み合わせたハーフティンバー様式の木造平屋建ては英国風で、鳶色の魚鱗葺き屋根と自然な調和がとれている。そうやって隅々まで観察してしまうのは、彼の職業所以であった。

それ故に、声をかけられるまで、尚春はひとの気配に気づきもしなかった。

「こんにちは」

柔らかく耳に届いたその声に、はっと視線を動かす。

青紅葉の陰からこちらへと歩を進めるうら若き女性を見止めて、密かに息をのんだ。

おぼろ雲の切れ間から顔を覗かせた陽光が、彼女の輪郭を浮かび上がらせる。西洋風の顔立ちをしている。編み込まれた栗色の束髪は光の角度のせいかわずかに黄金を帯び、千草鼠色の縞小紋が包む軀からだは華奢で、細い手に摘み取ったばかりらしい藤の枝を抱えていた。

しかし、何よりも目を引いたのは、切り揃えられた前髪の下から覗く緑を帯びた榛色の瞳だった。

「あの……?」

小首を傾げ、女性は頭一つ分背の高い尚春を見上げる。

あゝすみません、と尚春は中折れ帽を脱ぎ、軽く一礼をした。

「こんにちは。本日、鈴川様とお約束をしているミルズ建築事務所の者です」

三つ揃えの背広の内ポケットから名刺を取り出す。

彼女は名刺を受け取りさらりと目を通すと、笑みを浮かべた。

「はい、夫人からお聞きしております。どうぞこちらへ、ご案内いたします」

先を歩き出した彼女の手元からふわりと藤の芳香が広がる。尚春はその後ろ姿を数秒見つめてから、その後を追った。

技巧を凝らした邸宅であることは、細やかな造りを見れば一目瞭然だった。玄関ポーチを進んだ先の両開き扉の上には家紋を模った見事なステンドグラスがはめられており、中に入っすぐの玄関ホールは天井が高く作られているため開放的だ。

女性は迷うことなく右の扉の前に立ち、軽くノックをしてから開ける。

応接室であるその部屋もまた見事で、煌びやかな金唐紙の壁紙と落ち着いた色で統一された家具や調度品——猫足の卓子や天鷲絨のカーテン、鈴蘭型の照明はどれも一級品ながら、そうと感ぜさせない品の良さで来客を出迎えた。

「鈴川夫人、ミルズ建築事務所の方が来られました」

彼女の視線を辿った先、こちらに背を向けて椅子に座っていた女性が優雅な所作で振り返った。

鈴川夫人と呼ばれたそのひとは、老齡の貴婦人だった。洋鬘に纏めた髪は白く、首まで覆った黒いドレスを身に纏っている。右手に杖を持っているが、背筋を伸ばして座る姿は氣品に満ちあふれていた。

夫人は柔らかに目を細めて、

「まあ、ようこそおいでくださいました。お待ちしとりましたえ」

やんわりながらもはっきりとした上方言葉が耳朶を打った。

尚春は丁寧に一礼をする。

「お初にお目にかかります。ミルズ建築事務所から参りました、設計技師の御書尚春ごしよです」

「ミルズさんから話は聞いたりしますよ。鈴川タカヲと申します。こんなところまで来てもらうて、遠かったですでしょう？」

苦労ように眉をわずかに下げた夫人に、尚春は軽く頭を振って答えた。

「いいえ、自動車で参りましたので。須磨を訪れるのは初めてですが、とても良いところで驚きました」

勿忘草のワンピース

迎えの自動車の窓の向こう、晴れ渡った空を背に輝く白亜の洋館が見えたとき、都夜子はその変わらぬ美しさにほうと唇を綻ばせた。

開け放たれた窓から潮の香りを含んだ緩やかな風が吹き込んで、前髪を揺らす。京都の空気と異なるそれは、年に一度、ここ須磨で数日を過ごす夏の特別な香だ。

「高戸たかどの伯父さまのお屋敷は、何度見ても綺麗やなあ」

「……都夜子さん、顔を出すと危ないですよ」

隣に座る母が都夜子の着物の裾を軽く引つ張った。ゆったりとした口調は少し呆れた様子。母は元は財閥のお嬢さまなので、どんな立派な屋敷でも驚きはしないのだ。

車が屋敷の敷地へと続く鉄の門をくぐり抜けると、白亜の洋館の全貌が見えた。叔父さまが言うところによれば、日本で数少ないスパニッシュ・コロニアル様式と呼ばれる建築様式らしい。瑠璃色のスペイン瓦に白い漆喰の外壁、正面の半円窓には蔦模様のレリーフが施されていて異国情緒あふれている。高戸財閥家が誇る美しい別荘であった。

玄関に続く階段前に停車すると同時に、大きな正面扉が開いてふたりの少女が軽やかに駆け寄ってきた。揃いの珊瑚色の涼やかなワンピースに断髪のマダアンな姿は眩しい。

「都夜子さん、叔母さま、ごきげんよう。お待ちしていましたのよ！」

「わたくしも楽しみで眠れなくてよ」

車を降りた都夜子の手を握り、ふたりは瓜二つの顔に満面の笑みを携えて挨拶をした。都夜子もにこりと上品な笑みを浮かべ、いとこたちに視線を合わせた。

「ごきげんよう、松乃さん、梅乃さん。ご機嫌はいかが？ わたくしも会えるのを楽しみにしていましたのよ」

するとふたりは顔を見合わせ、少しの間を置いて、声を上げて笑い出した。それにつられるように都夜子もいたずらっぽく笑う。

「やっぱり、帝都の言葉はおかしいなあ」

「ほんまになあ」

「……まあ、ふたりが先にはじめはったんやないの」

「だって、梅乃が少女小説のお言葉を真似したいて」

「松乃ねえさまも、素敵やわあ、って言うてたやないの」

彼女たちは生粋の大阪商人の娘なのだ。はきはきとした性格は父親譲りである。高戸の叔父さまには三人の娘がいて、上の姉は一年前に京都の華族家に嫁ぎ、その下の松乃と梅乃は双子の姉妹で都夜子の一つ上の十八歳だった。年が近いからか、三人は幼い頃からと

ても仲が良い。

一通り笑ったふたりが左右に並び都夜子と腕を組んできた。

「叔母さま、つやちゃんをお借りしてもよろしいやろか？」

母を振り返りながらも、ふたりはすでに歩き出している。

「はいはい、どうぞ好きにしておくれやす」

母は少女たちを軽く見やって、手をさっさと振った。

都夜子を屋敷の中へと導きながら、その間にも少女たちは小鳥の囀りのようにピチピチと話題を変えていく。

「つやちゃんの薄物可愛らしいね」

「ほんま、よう似合ってるわあ」

松乃がしみじみと都夜子を上から下まで見つめ、梅乃がうんうんと頷く。

「おおきに」

萌黄色の地に白い小花を散りばめた縞の小紋は、一目惚れした反物を自分で縫ったものだ。流行ものとお洒落が大好きなふたりに褒められると、なんだか嬉しい。

「ほんまは松ちゃんと梅ちゃんみたいに洋装もしてみたいけど、お父さんが『足の見える服ははしたくない』て許してくれなくて……」